フローベールと民主主義小説

菅 谷 憲 興
〈立教大学〉

Résumé

Plusieurs critiques contemporains de Flaubert ont cru pouvoir rattacher ses œuvres romanesques à la démocratie de plus en plus triomphante. Armand de Pontmartin, entre autres, a qualifié *Madame Bovary* de « roman démocrate », et accusé vivement son auteur de représenter l'égalité démocratique. Ce critique, complètement oublié de nos jours, mettait surtout en cause l'esthétique flaubertienne de l'impersonnalité et son « égalité implacable » se permettant de tout peindre. En dépit d'une naïveté indéniable à nos yeux, cette lecture politique de *Madame Bovary* par un critique réactionnaire du XIXe siècle est d'un intérêt majeur dans la mesure où elle nous permettra de mieux saisir l'impact qu'a eu le roman de Flaubert à l'époque. Par le biais d'une étude de la réception, nous chercherons à apporter une lumière nouvelle sur la dimension politique et sociale du texte flaubertien, ce qui reviendra à souligner de nouveau sa modernité littéraire toujours vivante.

1857年2月7日、パリ軽犯罪裁判所において裁判官デュバルルが下した無罪判決は、「公衆および宗教道徳、ならびに良俗に対する壊乱」によって告発されていた『ボヴァリー夫人』の裁判に終止符を打った。編集者ミシェル・レヴィが検事局からの上告の可能性を恐れたため、この作品はさらに二ヵ月後にようやく店頭に並べられることになる。従って書評が出始めるのは5月になってからだが、それはこの小説に対する第二の裁判提起とでもいえるものであった。実際、このフローベールの最初の傑作に関する論評は当時の主要な新聞や雑誌に数ヵ月の間多数掲載されるのだが、これらのなかで異論の余地なく最も傑出したものといえるサント＝ブーヴとボードレールの論評は今日でもなおフローベール研究にとって欠かせない参考文献であり続けている[1]。しかし同時にこの両者の否定しえない現代性のゆえに、我々はこの小説の同時代の受容が引き起こしえた複雑な問題提起を捉え損ねるおそれがある。二、三の特権的な固有名に受容の問題を還元することはできず、それ故、当時はある程度の名声を享受していた二流の批評家たちについても研究する必要性が生じてくる。彼らはまさにその凡庸さのゆえに、フローベールの諸作品のインパクトを誰よりもよく反映していたと考えられる。このインパクトは、フローベールという作家の神聖化それ自体に伴って失われて久しいが、我々はこれからフローベールのエクリチュールにそれが本来持っていたはずの力、多かれ少なかれ不安を起こさせる力を再び与えるべく、このインパクトの再生を試みよう。受容研究は文学の諸側面を把握するために有効であるが、ここではとりわけフローベールのテクストの政治的かつ社会的含意（この発表における我々の興味はそこにある）を考察することを可能にしてくれるだろう。

1 Sainte-Beuve, « *Madame Bovary*, par M. Gustave Flaubert », *Moniteur universel*, 4 mai 1857 ; Charles Baudelaire, « M. Gustave Flaubert, *Madame Bovary*. *La Tentation de Saint Antoine* », *L'Artiste*, 18 octobre 1857.

同時代の批評家たちを前にしたフローベール。確かに、彼は『書簡集』のなかで繰り返し、批評家たちの明晰さの欠如を嘆いている。例えば、J・デュプラン（よく知られているように、彼の役目はフローベールのためにその小説の書評を集めることにあった）に宛てたある手紙のなかで、「痛いところを突くような批評家はまだひとりも見つけていない」（1857年5月10日？[2]）と断言している。敵対的であれ、好意的であれ、いかなる批評家も「［フローベール自身が］称賛に値すると見なしている諸側面によって」彼を称えるほど、あるいは「［彼自身が］不完全であることを知っている諸側面によって」彼を批判するほど鋭くはないのだ。そのうえフローベールは別の手紙のなかで、「自分たちの務めを分かっていないこの愚か者たち」の判断など気にも留めないと主張する（E・フェイドー宛、1857年6月末あるいは7月初め）。周知のように文芸批評家に対するフローベールのこのような否定的な見解は決して変わることはなかった。しかしながらそれは、彼が自らの作品についての他人の発言に無頓着だったことを意味するものではない。それどころか、彼は自分について書かれた論評を生涯ずっと入念に収集していたことが知られている。我々は『書簡集』の多くの箇所においてそのことを確認することができるし、同じく『ブヴァールとペキュシェ』執筆準備のために集められた資料集もそのことを証している。事実、この資料集には「フローベールに向けられた批判的見解」に関する資料 dossier が含まれている（g226[8], f° 208–232）。友人デュプランの筆跡であるこの資料は、主に『感情教育』に関して「印刷された最もコクのある愚かな批評のうちのいくつか」（M・レヴィ宛の手紙、1861年11月あるいは12月）の抜粋からなっている。従って認めなければならないことは、一方でフローベールは批評家たちに対してあからさまに軽蔑の意を示したが、他方では彼らの批評的言説に対してかなりの注意を払い続けたのであり、それらの言説の愚かさはそれが彼自身の作品を問題にしているだけに一層明白なものとならざるをえないのだ。

『ボヴァリー夫人』に関する様々な書評を吟味してみれば、スキャンダルだったのはいわゆる「没我性 impersonnalité」であることにすぐに気付くだろう。批評家たちは絶えずフローベールの写実主義（レアリスム）を強調し、彼らのなかにはそれを物質主義と同一視するものもいたが、もちろんそこには悪意がないわけではない。バルザックの名がしばしば、写実主義の系譜の元祖として引き合いに出され、この系譜には描写への偏執が激しく非難された。銀板写真（ダゲレオタイプ）というメタファーが多くの批評家のペンのもとに現れ、同様に「作家＝解剖学者」のイメージも、サント＝ブーヴの名高い論評に端を発してまさに紋切型になった。そのうえ批評家のなかには、フローベールの小説に多かれ少なかれ軽蔑的なレッテルを貼り付けるものさえいた。例えば、ジャン＝ジャック・ヴァイス Jean-Jacques Weiss にとって、『ボヴァリー夫人』は「乱暴な文学」の典型である（『現代評論 *Revue contemporaine*』、1858年1月15日号）。ギュスターヴ・ヴァプローGustave Vapereau は1858年の『文学および劇年鑑 *L'Année littéraire et dramatique*』（アシェット社、1859年刊）のなかで「宿命論的文学」に言及してフローベールの体系的な不感不動性 impassibilité を告発している。またヴァプローはあきらかに『世界報知 *Moniteur universel*』の批評家から着想を得て、「生理学的文学」についても語っているが、この表現を再び取り上げたギュスターヴ・メルレ Gustave Merlet は、さらにこれをもう一つの呼び名「ボヴァリスム」に置き換えた（『ヨーロッパ評論 *Revue européenne*』、1860年6月15日号）。それゆえこのよく知られた語の最初の用例は、約30年後にジュール・ド・ゴーチエによって与えられることになる意味とは無関係であることが判る。最後に、今度はアルマン・ド・ポンマルタン Armand de Pontmartin が、エドモン・アブー作『ジェルメーヌ』および『ボヴァリー夫人』を扱った論評に「ブルジョワ小説と民主主義小説」というタイトルを付けている（『コレスポンダン *Correspondant*』、1857年6月25日号）。

2 『書簡』からの引用はすべて次の版によるが、ここではそれぞれの手紙の日付と名宛人のみを記す。G. Flaubert, *Correspondance*, édition par Jean Bruneau, et par Yvan Leclerc (t. V), Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 5 vol., 1973–2007.

このような軽蔑的な呼称はすべてフローベールの没我性を対象としているが、そのなかでも特に最後の「民主主義小説」という呼称が、ここで我々の関心を引くものとなるだろう。アルマン・ド・ポンマルタン（1811年生、1890年没）は現在では完全に忘れ去られた文芸批評家だが、彼の同時代人たちにはサント＝ブーヴの好敵手と見なされていた。バルベー・ドールヴィリーが「キリスト教のサント＝ブーヴ」と呼んだ（「我々の批評と彼らの批評」、『レヴェイユ *Le Réveil*』、1858年1月2日号）この批評家は、当時は相当な名声を享受しており、『月曜閑談』の著者サント＝ブーヴに対抗して『土曜閑談』を執筆していた。サント＝ブーヴよりはるかに反動的だったポンマルタンは、主に王党派やカトリックの刊行物に寄稿し、貴族的諸原則の支持者として写実主義の作家たちには体系的に敵対する姿勢を示していた。彼はとりわけフローベールの最初の三作品（『ボヴァリー夫人』、『サランボー』、『感情教育』）に関して手厳しい論評を書いているが、その独断的な論調は今日それを読む者の気分を害するほどのものである[3]。かくして『ボヴァリー夫人』に関する論評のなかで彼は、「善と悪を、美と醜を、大なるものと小なるものを、生物と無感覚の物を、魂と物質を同じ水準に従わせるこの仮借なき平等」を告発する[4]。ところで、この結局のところ二流の批評家がフローベールに向けた糾弾は、我々にとって思いのほか意義深いものである。上記のフレーズはもちろん、『ブヴァールとペキュシェ』第II巻の最後に置かれる予定だった有名な一文を思い出させずにはおかない。実際、このフローベールの未完の遺作のシナリオには「あらゆるものの平等、善と悪の、美と醜の、無意味なものと特徴的のものの平等」（gg10, f° 67）と記されている。この二つのテクストの類縁性は一目瞭然であろうが、はたしてそれがたんなる偶然の一致なのか、あるいはそこに本当に影響関係があるのかどうかという問題が残されている。この、まったく思いがけない相似性を一体どのように解釈すべきなのか。『ブヴァール』のテクストはポンマルタンの批評に対するいわば隠されたアイロニカルな回答なのであろうか。もしそうだとすれば、我々はそこに、フローベールの詩学に関連してどのような意味を見出すことができるだろうか。

実際ポンマルタンは高らかに、「ギュスターヴ・フローベール氏、それは文学における民主主義だ」と断言している[5]。この考えが我々からすればいかに奇妙なものに見えようとも、フローベールを批判するために「民主主義（デモクラシー）」という語を用いたのがこの批評家一人ではなかったことは注目に値する。いくつかの例を引用するなら、シャルル・ド・マザド Charles de Mazade は、「社会的かつ再生的な思想」によって特徴付けられる近代文学のある傾向に『ボヴァリー夫人』を関連づけている（『両世界評論 *Revue des Deux Mondes*』、1857年5月1日号）。名高い『両世界評論』の時評担当者だったマザドは、この新しい文学の特性は登場人物を「人道主義的民主主義の生きた予言」にすることにあると主張する。民主主義的な思想の表現をフローベールの小説のなかに見るという考えは我々にはいささか突飛なものに思われるが、しかし同時代の読者たちにとってはおそらくそうではなかった。少なくともバルベー・ドールヴィリー、この自他共に認めるフローベールの「敵」は、同じような批判を彼に向けていた。他の批評家たち同様に、バルベーは一度ならずフローベールの物質主義を非難し、『ブヴァールとペキュシェ』に関する論評のなかではフローベールを「文学の労働者」呼ばわりした（『コンスティチュショネル *Constitutionnel*』、1881年5月10日号）。さらに、自らは「文学における貴族主義者という犬たち」に与することを躊躇わないバルベーは、一方でフローベールを「文学の民主主義者たち」の側へとはっきり追いやっている。すなわち、この意図的に党派的たらんとする作家に

3 『サランボー』および『感情教育』に関するポンマルタンの論評は、『ガゼット・ド・フランス *Gazette de France*』誌のそれぞれ1862年12月21日号、1869年12月12日号に掲載されている。

4 Armand de Pontmartin, « Le roman bourgeois et le roman démocrate. MM. Edmond About et Gustave Flaubert », *Nouvelles causeries du samedi*, M. Lévy, 1859, p. 306.

5 *Ibid.*, p. 290.

とっては、フローベールこそ文学における民主主義の優位を象徴していたといえよう[6]。

これらの批評家たちが皆、フローベールの小説の複雑な美学に対して明白な無理解を示していることは明らかである。今日では我々は、フローベールの政治的見解を十分に知っているが、それはほぼ反民主主義的なリベラリズムと定義できるようなものである。この点に関して、『書簡集』にはこれ以上ないほど明確な断言がいくらでも見つかる。「私は民主主義を憎む」と、1871年4月30日のG・サンド宛の手紙のなかで彼は表明する。その上、「デモクラスリーdémocrasserie」（垢を意味するcrasseとデモクラシーを組み合わせたフローベールによる造語で、1866年11月5日のH・テーヌ宛の手紙に見られる）の上昇に対する不信感は、1848年の世代とでも呼びうる作家たちのグループによって共有されていた。例えば、フローベールの友人だったルナンとテーヌも頻繁に「卑しい民主主義」を批判しており、『哲学的対話および断片』（1876年刊）の著者ルナンによれば、デモクラシーは「すぐれて神学的な誤り」でしかない[7]。ルナンのこの著書に関してはさらに、フローベールがルナンに「民主主義的平等に」反対して立ち上がったことをわざわざ感謝しており、平等を「世界における死の要素」であると主張していたことを指摘しておきたい。（1876年5月22日、ルナン宛の手紙）。

ゆえにその意味では、ポンマルタンのように、民主主義的精神を体現しているといって『ボヴァリー夫人』の著者を非難するのは確かに不当である。ところでポンマルタンの批判が、出版された直後にある嘲笑の的になったことをここで指摘しておこう。1857年9月20日号の『芸術家 *L'Artiste*』誌においてフェイドーの友人でもあるグザビエ・オーブリエ Xavier Aubryet は、「ポンマルタン氏の［…］ギュスターヴ・フローベールに対する信じがたい攻撃」を問題にしている。この論評は「批評の愚かさ」と題されているが、それは他ならぬポンマルタンの愚かさのことを指している。意図のない場所に意図を読み取って攻撃するこの反動的な批評家の盲目ぶりを、オーブリエはあからさまに嘲笑している。「ポンマルタン氏によれば、［…］民主主義的な考えこそがギュスターヴ・フローベールを掻き立てたということになる。これ以上厚かましく、見当違いな意見をいうことはできない［…］。何だって！　2月24日こそがフローベールに創作の着想を与えたのだって！」ところで、まさしくオーブリエのこの論評こそがフローベールに、自分の小説に対するポンマルタンの酷評を知らせたのである。1857年9月20日頃のものと推測されるJ. デュプラン宛の手紙でフローベール自身が「汚物」と呼んでいるこの論評は、『書簡集』のなかで数度にわたって言及されている。例えば、「ポンマルタンはおおいに私を楽しませた」（J・デュプラン宛、1857年10月3日あるいは4日）。「私はポンマルタンの非常に長い酷評を読み直した。そのなかで彼は私に『民主主義がうかがわれる』といって非難し、私が『凡庸と誇張のあいだを』行ったり来たりしている、等々と言っている。こういったすべては非常に馬鹿げたものだから、私にとってはどうでもいいことだ」（L・ブイエ宛、1857年10月8日）。とはいえ、ここで断言される無関心を文字通り受け取ってはならないだろう。少なくともフローベールが20年後にもこの論評を覚えていたことは、我々の知るところである。新たな編集者G・シャルパンチエ宛の1877年5月20日の手紙のなかに、フローベールは参考文献目録を一つ挿入しているのだが、これはフローベール研究を執筆する意図のもとに書誌情報を求めてきたドイツ人の編集者に向けられたものである。『ボヴァリー夫人』についてはフローベールは三つの論評しか引用しておらず、ポンマルタンの論考がサント＝ブーヴおよびキュヴィリエ＝フルーリと並んで引かれている。おそらくあまり熟慮されたものではないこの選択は、し

6　実を言えば、当時の多くの作家たちにとって、そもそも写実主義一般が近代民主主義の産物と映っていた。例えば、シャルル・ド・マザドは、既に1850年に「文学における民主主義」と題された論考を発表している。『両世界評論』の3月1日号に掲載されたこの論考では、ウージェーヌ・シューの『民衆の秘密』に関連して、まさに「剥き出しの状態のままの憎悪、羨望、中傷」が批判されている。これらの例はしかしながら、『ボヴァリー夫人』が文学における民主主義の問題をとりわけ鋭く提起した事実を何ら妨げるものではない。

7　Ernest Renan, *Histoire et parole. Œuvres diverses*, édition par Laudyce Rétat, Robert Laffont, « Bouquins », 1984, pp. 663–664.

かしながらまったく無意味なものではありえないし、いずれにせよポンマルタンの名にある重要性を認めることを可能にしてくれると思われる。加えて、先程述べた「受容」の資料がポンマルタンの2つの論評（『感情教育』論、g226[8], f° 227–228 および『シャルボノー夫人の木曜日』、f° 231–232）に関する読書ノートを含んでいることも忘れてはならないだろう。

ではここで、『ボヴァリー夫人』に関するポンマルタンの論評を注意深く読んでみよう。一体いかなる点において、このノルマンディーの片田舎を舞台とするフローベールの小説が民主主義的だといえるのか。実をいうと、ポンマルタンの分析は二つの異なる水準を対象としている。第一に、民主主義的精神の徴が明らかに見て取れるのはエンマの心理である。『ボヴァリー夫人』を「不満な民主主義における諸感覚と想像力の病的な高揚」と定義したうえで、ポンマルタンは、このヒロインの悲劇的運命が、革命後の社会に特有の「中途半端に満たされた野心」にどれ程決定付けられているかを示す。このように、普遍的な平等化の本能そのものに他ならない民主主義的な羨望こそがエンマを特徴付けているということになる[8]。第二に、ポンマルタンはフローベールの没我性を問題にして、それを「文学的民主主義」の徴候を示すものと見なしている。厚かましくもすべてを描き出す、まさに「社会的かつ文学的釣り合いに対する民主主義的軽蔑」[9]の証であるところの「この際限なき平等主義」[10]を、ヒエラルキーと差異化の断固たる支持者ポンマルタンは激しく攻撃する。彼はフローベールの描写的文体を、「あらゆる物とあらゆる存在の絶対的平等の感情」[11]に起因すると見なして激しく非難する。『ボヴァリー夫人』の著者は没我的な様式で卑俗な主題を扱っているが、この様式はそこに「ある社会的状況［つまり民主主義］に固有の知的衰弱」[12]の例証を見るポンマルタンにとっては端的に受け入れ難いものだった。従って、ポンマルタンが当時の文学に対して投げ掛ける妥協の余地なき評決は以下の通りである。「気をつけなさい！　もしあなた方が心を高めるかわりにすべてをおとしめ続けるならば、文学においては、あの仮借なき平等に、鉄のくびきと同じくらい抗し難く、善と悪を、美と醜を、大なるものと小なるものを、生物と無感覚の物を、魂と物質を同じ水準に従わせる平等に、要するに『ボヴァリー夫人』に行き着いてしまうだろう」[13]。

フローベールの没我性が、民主主義的平等に特有の野蛮さとして非難される。ポンマルタンのこのような読解は、現代の我々から見れば非常に素朴で還元的なものではあるが、その一方でこの自称文学の貴族主義者の感性を大いに困惑させずにはおかなかったフローベールの詩学の根本的な一面を啓示してもいる。そもそも、『書簡集』を読んだものなら皆、フローベール自身が『ボヴァリー夫人』の主題をひどく嫌っていたことを知っている。ここでは数多くの証言のなかから一つだけ引用しよう。「私の主題の俗悪さは時々、私に吐き気を催させるほどです。そしてまだこれから非常に多くの平凡なものを、それもよく書かなければならない困難は、私をひるませます」（1853年7月12日、L・コレ宛の手紙）。この作者の告白を決して過小評価してはならないだろう。フローベールにとって文学の美は殆ど宗教的ともいえる次元を備えていた。しかしながら、「ブルジョワ的な主題」（1853年9月12日、L・コレ宛の手紙）へのこの嫌悪は、近代社会の凡庸さから決定的に作家を引き離すどころか、逆にその凡庸さを彼の美学の構成要素にすることになる。実際、それこそが主題の無差別、あるいはE・フロマンタン宛の手紙（1876年7月19日）に見られる表現を借り

8 Pontmartin, *op. cit.*, p. 299.『ボヴァリー夫人』における民主主義的羨望のテーマに関しては、松澤和宏氏の諸論考を参照。特に、『「ボヴァリー夫人」を読む――恋愛・金銭・デモクラシー』、岩波書店、2004年。また、« Une lecture politique de *Madame Bovary* : le bovarysme et l'envie démocratique postromantique », *Revue Flaubert* (en ligne), n° 5, 2005, site Flaubert (Université de Rouen), www.univ-rouen.fr/flaubert.

9 Pontmartin, *op. cit.*, p. 304.

10 *Ibid.*, p. 301.

11 *Ibid.*, p. 300.

12 *Ibid.*, p. 306.

13 *Ibid.*

れば「主題の無意味さ」に他ならず、フローベールはこれを文学の原則として打ち立てることを主張している。この点に関しては、1853年6月25日のL・コレ宛の手紙から引いた次の箇所が、可能な限り最も明示的である。「文学には、美しい芸術の主題はない。ゆえにイヴトーはコンスタンチノープルに値します。したがってどんな主題でも他のすべてと同じくらいよく書くことができるし、芸術家はすべてを高めなければならないのです」。

ポンマルタンは『ボヴァリー夫人』の著者を、「この仮借なき平等、悪を前にした創造の平等」[14]のゆえに非難する。この平等を、フローベールは彼の美学の核の一つにしたといえるだろう。純粋芸術 l'art pur の観点から構想された凡庸さの美学は、イブトーにもコンスタンチノープルにも等しい興味を認める。というのは実際、「文体というものはそれだけで事物を見る絶対的な様式であり」(1852年1月16日、L・コレ宛の手紙)、近代の作家はいかなる主題も引き受けなければならない。このようにして強調されるのが文学作品の自律性であり、それは最も散文的な現実を表象することによって美を作り出すことができる。そして文体に関するこのような考え方の地平に、「何に関しても書かれていない書物」、このよく知られたフローベール的エクリチュールの夢が、おのずから浮かび上がることになる。しかしながらここで見逃してはならないのは、この美学的戒律、「いたる所で、そしてすべてに関して、芸術は作ることができる」(1854年1月29日、L・コレ宛の手紙)と措定するこの戒律の背後には、主題としてブルジョワ的凡庸さを避けることの不可能性に関するフローベールの鋭い意識が確実に存在しているということだ。一度ならずフローベールは、実のところ自ら嫌悪してやまないと言うその主題の選択を、手紙の相手に対して、そしてまた自分自身に対しても正当化しようと試みている。例えば、1869年1月1日の手紙の中で、ジョルジュ・サンドにこう説明する。「そして私は、自分がしたいことは何もしていません！　というのは、人は自分の主題を選ぶのではなく、主題が自らを押し付けてくるからです」。文学のモデルニテとは、少なくともフローベールにとっては、精彩を欠いた世界の無意味さに可能な限り寄り添って書くことを作家が受け入れる時に始まるものである。結局のところ、ポンマルタンが『ボヴァリー夫人』の散文のなかに民主主義の匂いを感じたことは、決して間違っていたわけではない。フローベールのエクリチュールは、著しくアイロニカルなやり方ではあるが、平等の支配を十全に引き受けるものである。この点に関してJ・ランシエールが「エクリチュールの民主主義」という言い方をしているが、おそらくそれはいささか誇張されている[15]。というのも、フローベールの作業は常に、小説の表象に内在的な超越性を与えることを目的としているのだ。しかしながら、超越性を目指すこの作業は、以後すべてを覆い尽くす平等という背景の上でのみなされるのであり、ただ文学の形式のみがその平等を絶対的に超えるものたらんとするのである。

この発表を終える前に、『ブヴァールとペキュシェ』第II巻の最後に出てくるはずであった表現についての考察がまだ我々に残されている。ブヴァールとペキュシェは「無害な愚か者二人」だということを知事に説明する医師ヴォコルベイユの手紙を偶然見つけて、二人の筆耕は次のように自問する。

> 「この手紙をどうしようか。」
>
> 考えるな！　書き写そう！　ページを埋め尽くして、「記念碑」を完成させなければならない。
>
> あらゆるものの平等、善と悪の、美と醜の、無意味なものと特徴的のものの平等。現象以外に真なるものは無い。(gg10, f° 67)

14 *Ibid.*, p. 300.

15 Jacques Rancière, *La parole muette. Essai sur les contradictions de la littérature*, Hachette Littératures, 1998, p. 117. ランシエールは、この著作のある注(p. 183, note 17)のなかで、ポンマルタンの引用を『ブヴァール』の一節に結び付けている。我々の小論はこの注を出発点として、これをフローベール研究の枠のなかで発展させたものである。なおフローベールの小説美学については、特に次の著作を参照のこと。Gisèle Séginger, *Flaubert. Une éthique de l'art pur*, SEDES, 2000.

結局のところ、フローベールがこれを書きながらポンマルタンの論評のことを考えていたか否か、正確には分からない。しかしながら我々は、この引用箇所のなかに問題の論評の反響を、たとえかすかなものではあれ、聞き分けることができると考える。フローベールに対して激しく非難された「あらゆるものの平等」が、今やフィクションのなかで声高に宣言される。確かに、Cl・ムーシャールとJ・ネーフが指摘するように、「この文はブヴァールとペキュシェの言葉として与えられて」おり、したがってこの作品の最終的な真理にはなりえない[16]。しかしながらフローベールにおいては、特に『ブヴァールとペキュシェ』では、作者と登場人物のあいだの還元不可能な隔たりは、テクストの自己言及的な位相と相容れないものではない。それゆえこの箇所を、テクストのそれ自体による表象と解釈することはしごく正当であろう。二人の筆耕のこれらの言葉は、ポンマルタンおよびその他の批評家たちによって侮蔑的に民主主義的と形容されたフローベールのエクリチュールそれ自体に向けられた合図なのだといえよう。芸術家フローベールのすべての野心が目指すのは、近代世界の一般化された無差別、まさに「あらゆるものの平等」を表象することを引き受けた上で、それを文体に内在する力によって超越することにある。『ブヴァールとペキュシェ』のシナリオが教えるところによれば、この未完の小説は、「机の上に身を傾けて書き写している二人の主人公たちの眺めで終わる」はずであった。あたかもフローベールが彼の最後の小説を、書くという行為の入れ子構造によって閉じることを望んだかのように。そのことは、そこに依然として残る作者と二人の主人公の間の隔たり、実は非常に僅かなものでしかない隔たりにもかかわらず言えることだろう。ブヴァールとペキュシェのように書き写すこと、それはいわばエクリチュールの絶対的平等である[17]。

（立教大学博士後期課程、大坪裕幸 訳）

16 Claude Mouchard et Jacques Neefs, « Vers le second volume : *Bouvard et Pécuchet* », *Flaubert à l'œuvre*, Flammarion, 1980, p. 200.

17『書簡』の少なからぬ箇所が、ブヴァールとペキュシェに奇妙によく似た様相のもとに作家の姿を描き出している。例えば、次に引用するのは、ロジェ・デ・ジュネット夫人宛て1872年5月15日の手紙の一節である。「そして未来は私にとって一握りの白い紙に要約されます。その白い紙を、倦怠でくたばらないためだけに、黒く塗りつぶさねばならないのです」。

質疑応答

フィリップ・デュフール　ポンマルタンは『サランボー』や『感情教育』についても「民主主義的小説」というレッテルを用いているのでしょうか。

菅谷憲興　ええ、『感情教育』の書評でも同じレッテルを用いています。『サランボー』では使っておりませんが。興味深いことは、ポンマルタンが『ボヴァリー夫人』の成功を第二帝政の精神に帰していることです。

デュフール　ユゴーの『レ・ミゼラブル』に対してB・ドールヴィリが同じ表現を用いているのは興味深いと思います。

松澤和宏　大変刺激的なテーマをめぐる発表だと思います。4年ほど前に私も『「ボヴァリー夫人」を読む――恋愛・金銭・デモクラシー』（岩波書店）を刊行し、Revue Flaubert誌に「ボヴァリスムとポストロマン主義的・民主主義的羨望」についての論考を発表しました。私の考えでは、フローベールの『ボヴァリー夫人』を民主主義的小説と解するのは一つの可能な読みではありますが、フローベール自身は善悪美醜のヒエラルキーを崩していく民主主義的平等はあくまでも批評の対象であって、そこにこそフローベール的なイロニーの射程があると思います。したがってあなたが言う民主主義の「絶対的な超克」とはイロニーではないとしたら、何になるのでしょうか。

菅谷　私は必ずしも同じ意見ではありません。イロニーは確かに重要ですが、私にとってはそれは重要なことの一面でしかなく、また私はイロニーのためにフローベールを愛しているわけではありません。私の出発点はジャック・ランシエールの『無言の言葉』のなかでの指摘です。彼はポンマルタンのこの一文を『ブヴァールとペキュシェ』に、コメントなしに、関連づけています。文学は平等を否定するものがあります。それは超越性ですが、文学形式に内在しています。この形式はイロニーを含むかもしれませんが、イロニーだけではないのです。

松澤　「内在的超越」、「絶対的超克」、私も多分まったく同意できるかなとも思いますが、しかしながらそれらによって何が意味されているのか明らかではないのです。もしそれが結論であるなら、説明をしていただかないと……。

菅谷　多分観点が違うのだと思います。フローベールが民主主義的平等をいかに引き受けているのかを強調したのです。同時代の批評家の幾人かがフローベールのエクリチュールを民主主義的と見なしたということ、それを私は説明しようとしたのです。私の論文の狙いは終わったのです。

ジゼル・セジャンジェール　この議論に関しては、私が昨日引用したモーパッサン宛ての手紙が参考になると思います。「あなたはものの実在を信じているのでしょうか。ものを見るいくつもの仕方しか存在しないのです」とフローベールは述べています。そこでは平等の側に立っているのです。すべての観点の平等です。しかしフローベールはそこに留まりません。なぜなら彼はそうした観点をも作品のなかに入れようとして作中人物に自分の立場を与えていますが、こうしてさらなる展開をもたらしているのです。

ステファンヌ・ヴァッション　ポンマルタンは7月王政下の批評家であります。ところであなたが示された主題の階梯が崩れることは7月王政期の小説全体が関わった現象です。バルザックはフローベールと異なって、小説家の技法はコントラストを導入することにあると述べていますが、彼の平等主義断罪はイデオロギー的なというよりもむしろ芸術的な観点なのです。